令和四年一月十日発行
皇學館論叢第五十四巻第四号　抜刷

黄泉比良坂の諸相と黄泉国の所在

足立　涼

皇學館論叢　第五十四巻第四号
令和四年一月十日

黄泉比良坂の諸相と黄泉国の所在

足立　涼

□ 要　旨

黄泉国の所在をめぐってはすでに多くの研究があり、大きく本居宣長をはじめとする「地下説」と、佐藤正英氏をはじめとする「山中説」とに説が分かれてゐる。しかしながら、両者の説を検討したとき、それぞれ不足するところがあり、従ふことができない。

そこで、葦原中国と黄泉国とを接続する「黄泉比良坂」の諸相が、上って、そして下る坂といふものであり、「他界」といふ葦原中国から見ての「ほかの国」の世界観は、まったく異なった異世界ではなく、葦原中国と同レベルの世界であるといふ前提に立ったとき、そして、世界の辺境の地である山や海が他界との接続地点であることを勘案すれば、黄泉比良坂の諸相は葦原中国と黄泉国との端である「山」の黄泉国側の境界かつ坂であり、黄泉国の所在は境界たる山を越えた平面上のその先にある、葦原中国と同じ次元の世界であると云へる。

イザナミ命は比婆山に葬られたが、イザナミ命はその先へ往くと観念された。神話的世界においては、イザナミ命は山を越えた向かうの世界に往ったのであり、イザナキ命はさういった他界を訪問したのである。

□ キーワード

古事記　黄泉比良坂　黄泉国　他界　境界

一、問題の所在

黄泉国の所在については、周知の通りすでに多くの議論が行はれてゐる。通説となる基礎をつくったのはやはり本居宣長であり、宣長は『古事記伝』において次のやうに述べる。

黄泉國は、〈中略〉死し人の往きて居國なり、下文に燭一火とあれば、暗處と見え、又夜之食國を知看月讀命の、讀てふ御名も通いて聞ゆればなり、さて祝辭に、吾名妖能命波、上津國乎所知食倍志、吾波下津國乎所知止申氐とのたまひ、又欲二罷妣國根之堅州國一、須佐之男命の詔へる【私記に、根國謂二黄泉一也と云、萬葉五に之多敝之使とよめるも、泉路のことなるが、下方使と聞ゆ、出雲國風土記に、伯耆國郡内夜見嶋と云ことあるは、黄泉に由あることありての名なるべし】などを以見れば、下方に在國なりけり(1)

このやうに宣長は、火を灯したこと、夜の国を統治するツクヨミ命と「ヨミ」の音が重なることから黄泉国は「暗處」であり、『延喜式』鎮火祭祝詞に黄泉国を指して「下津國」とあること、黄泉国と根之堅州国とを同一視してゐることなどから「下方に在國」であるとする。

このやうに黄泉国が地下にあるとする「地下説」はその後も多様な観点から多く提唱され、今日の註釈書の類に至るまで根強く存在してゐるが、一方で佐藤正英氏が提唱した、黄泉国は山にあるとする「山中説」もまた、多く支持されてゐる。

しかしながら、地下説にしても山中説にしても、諸氏が論じた内容には不足するところがあり、従ふことはできない。先に述べておくと、本稿では、黄泉国は山を越えた向かう側の平地にある、この世界と同レベルの国である、と

いふ結論を取る。これと同様の見解は、管見では目黒礼子氏が平成十一年に発表された論考で述べられてゐるのみであるが、本稿の結論の詳細や、そこに至るまでの過程は目黒氏とは異なる。

なほ本稿の引用文における傍線はすべて筆者が附した。「中略」など筆者が引用文を改変した箇所は、山括弧内にその旨を記した。また引用した文章は元の通りの表記とし、筆者の文章は新字体・歴史的仮名遣で記し、拗音・促音は小字で記した。『古事記』本文の引用はおうふう社本[2]により、『万葉集』の歌の引用は新潮日本古典集成本[3]により、字体や訓点は可能な限りこれに従った。なほ諸氏の論を取り上げる際、諸氏が引用した漢籍や古典などの本文は、煩雑になるため本稿での引用は控へておく。諸氏の論考に当たられたい。

また本稿では基本的に『古事記』本文に基づき、『古事記』の黄泉国説話について論ずるので、適宜『古事記』本文を引用する。『日本書紀』その他の類似説話には必要に応じて触れるが、詳細に論ずることは機会を改めたい。

二、地下説について

宣長以降、黄泉国が地下にあるとする説は、倉野憲司氏や西郷信綱氏が敷衍し、葦原中国を中心として高天原を上方に、黄泉国を下方に想定する垂直線上の三層構造の世界観が現れてゐると指摘した[4]。またこの理解は現行の諸註釈にも受け継がれ、日本古典文学大系本[5]、日本思想大系本[6]、新潮日本古典集成本[7]などがこの説を採ってゐる。

しかしながらこの説にはすでに多くの反対意見がある。まづ火を灯したのだから暗い世界だとする点については、山中説の立場を取る佐藤氏が「イザナキの命が櫛火を燭したのは、本文で明らかなように、宮殿の内においてのことである」と指摘してをり[8]、これには地下説の立場を取る中村啓信氏も賛同してゐる[9]。慥かに火を灯したのはイザナミ

命が入っていった殿の中を照らさうとしてのことであった（還二入其殿内一之間、〈中略〉湯津々間櫛之男柱一箇取闕而、燭二一火一）。この記述からは暗いと読み取れるのは殿内であって、黄泉国自体がどうであるかは読み取れない。

またツクヨミ命とヨミの音が重なる点については、上代特殊仮名遣の点から齟齬が生じることを倉野氏が指摘してゐる。[10]

鎮火祭祝詞については、上代特殊仮名遣の乱れから成立が新しいものであることを青木紀元氏が指摘してをり、[11]『古事記』の傍証として用ゐるには不十分である。また神野志隆光氏は『古事記』のテキスト外の内容は「直接無媒介に『古事記』の神話的世界観にもちこむことはでき」ず、「せいぜい傍証という程度の意味しかな」いのであって、「この祝詞の例はイザナキ・イザナミのよるところを「上つ国」「下つ国」と相対的に示すのみであり、「下つ国」が地下だということには必ずしも直結できない」ので、「傍証としても不十分」だと指摘してゐる。[12]

根之堅州国についても、神野志氏が「「黄泉国」と「根之堅州国」とを同一視することは、両者を異なった世界として設定する『古事記』の世界像に背反する」と指摘する。[13]これらの二つの世界は、共通する要素もあるが、名称が異なる以上は異なる世界として捉へるべきである。

かくして、宣長のごとく黄泉国を地下にある暗い世界であると理解する論は否定されることになる。しかし、宣長が挙げた四点のほかにも地下説の根拠となる要素がある。それは神野志氏が

宣長が言及しなかったのは、その立場からして当然であろうが、「黄泉国」と書きあらわす「黄泉」の漢語としての意義もまた、地下説を採るものにとってはひとつの証とされる。

と指摘した通り、[14]和語「ヨミ」にすでに地下といふ意味で熟してゐるであらう漢語「黄泉」を当てたといふ点である。尤も神野志氏はこれを鎮火祭祝詞と同様の理由で排してゐるが、『古事記』と時代が異なる鎮火祭祝詞とは違ひ、漢

語「黄泉」は『古事記』編纂の時代、すでに我が国に受容されてゐたであらうから、この点は検討の余地がある。

その検討を行ったのが中村啓信氏である。氏は「漢語「黄泉」そのものの検討から始めるべき」だとして、『荘子』秋水・田子方、『文選』「解嘲」、『孟子』滕文公、『管子』小匡、『春秋左氏伝』隠公、『漢書』武五子伝第三十三における「黄泉」の語を検討し、「漢語「黄泉」の観念は紛れもなく地下界のものであること」を明らかにし、国語「ヨミ」を表す漢字として漢語「黄泉」が選ばれた以上、「ヨミ」にも「黄泉」と同様の、地下であるといふ観念があったはずだとした。[15] 注目すべき論である。

しかしながら中村氏の論説には見落としがある。「ヨミ」と「黄泉」とは、「死者が行くところ」といふ共通点で結合した可能性もあるのである。その結果として「ヨミ」もまた地下であるようになってしまった可能性もあるのではないか。和語とそれに当てられた漢語との間に若干のニュアンスの差が生じるのは当然のことであり、記紀の編纂者が「死」といふ点に重きを置いたのであれば、地下でない「ヨミ」に「黄泉」の字が当てられても不自然ではない。

黄泉国研究では、往々にして『出雲国風土記』出雲郡宇賀郷の

即ち、北の海濱に磯あり。脳の磯と名づく。〈中略〉磯より西の方に窟戸あり。高さと廣さと、各六尺ばかりなり。窟の内に穴あり。人、入ることを得ず。深き浅きを知らざるなり。夢に此の磯の窟の邊に至れば必ず死ぬ。故、俗人、古より今に至るまで、黄泉の坂・黄泉の穴と號く。

といふ記述[16]が参照される。ここでのポイントは、「夢に此の磯の窟の邊に至れば必ず死ぬ」から「黄泉の坂・黄泉の穴と號」けられたといふ点である。無論、神野志氏が述べたやうに、『古事記』のテキスト外のことを持ち込んで考へるのは危険であるが、しかしこの記事は地下ではなく「死」といふ点において「黄泉」といふ語が上代に用ゐられたといふことの傍証にはなり得よう。

中村氏は「地下界を地上界や山上界に変換してしまうほど大きな乖離は、もはや翻訳と言えない」と述べるが、[17] 山中説の立場を取る西條勉氏は「和語のヨモ（ヨミ）が漢語の「黄泉」で捉えられたとき、死者の世界は、もともとの山中から地下の方に移し換えられたのだ」と言及してゐるので、[18] 中村説に直ちに従ふのは尚早であらう。

中村氏は論考の最後に、『幽明録』、『搜神後記』に見られる洞天説話と黄泉国訪問譚との共通性を指摘し、黄泉国への洞天世界の影響を示唆した。洞天とは洞穴のなかにある小宇宙であり、中村氏は「小さく狭い入口、そこに外部世界と内部世界の境界があるのであるが、そこを越えれば、忽ち内部は外部へと反転する」と表現するが、氏は黄泉国もその影響を受けてゐたのではないかといふ。

中村氏のこの示唆を継承したのは土屋昌明氏である。土屋氏は、中村氏の論を肯定したうへで、道教経典『真誥』における洞天説話と、黄泉国訪問譚とを比較し、その共通点として

① 通路を進んだ地中に存在し、通路は石を使って開閉する
② 地中なのに明るくて神のすむ宮殿がある
③ 地上世界との隣接性がある
④ その世界の主宰に関わる別の神がいる
⑤ その世界特有の食べ物がある[19]
⑥ 入口を同じくする別の世界が存在する

といふ六点を指摘し、洞天思想が黄泉国の形成に影響を与へてゐる可能性を呈し、黄泉国も洞天同様、入口が狭く地下にあるが、中は広く明るい世界であると理解した。しかしながらその結論については「可能性の域を出ない」「文献的な裏付けが取れたと言えるところまで至ることはできなかった」と消極的な姿勢を見せてゐる。[20]

土屋氏のこれらの指摘はいくつかの問題を残してゐる。

まづ①についてであるが、『古事記』に「尓、千引石引二塞其黄泉比良坂一。其石置レ中」とある行為は、これは境界を遮るといふ呪術的行為であり、必ずしも物理的に通路を塞ぐ行為ではないと考へる。それはトヨタマヒメ命が「塞二海坂一而返入」ったことを勘案すれば明瞭である。洞天のやうに、通路の開閉に直接石が用ゐられる訣ではない。そもそも黄泉比良坂は遮られ、閉ぢられた後、開くことはないのである。また②にも関はるが、黄泉国が地中であるかは問題を残してゐる。

次に⑤であるが、イザナミ命の「吾者爲二黄泉戸喫一。」といふ行為が、土屋氏の述べるやうな、黄泉国特有の食物を食べることだとは『古事記』には書いてゐない。むしろ黄泉国にはブドウやタケノコといった、地上と同じ食物が生えるのであり、「黄泉戸喫」は黄泉国で煮炊きされたものを黄泉国の住人と共に食べることが問題なのであると考へる。

また⑥であるが、これは地上が同じ入り口によって洞天と別の洞天とにつながっているやうに、葦原中国が黄泉比良坂によって黄泉国と根之堅州国とにつながってゐるといふことを指してゐる。土屋氏のこの言及は中村氏の「人体の左右の肺が、一つの喉口で息の出で入りを行うように、「黄泉比良坂」を入口あるいは出口の共通の通路とした」といふ言及[21]に立脚してゐるのだらうが、これは「黄泉比良坂」を単独の固有名詞と誤解したゆゑの解釈である。すなはち黄泉比良坂は普通名詞であり、黄泉国訪問譚に登場する黄泉比良坂と、根之堅州国訪問譚に登場する黄泉比良坂とは、名称は共通するが同一のものではない[22]。例へば他界との接点が一つだけでないといふことについて、本居宣長は「天浮橋」について「神代には天に昇降る橋、此所彼所にぞありけむ」と指摘してゐる[23]。

土屋氏の論は従来の地下説とは一線を画するものであるが、なほ不足があり、従ひ難い。

以上、宣長、中村氏、土屋氏といふことなった観点からの地下説を検討してきたが、それぞれ問題点があり、従ひ

難い。よって、地下説そのものにも従ふことはできないと考へる。また、高天原―葦原中国―黄泉国といふ垂直的な三層構造で『古事記』の世界観を捉へる観点にも賛同できない。

三、山中説について

佐藤正英氏は黄泉国山中説を提唱し、斯界に大きな影響を与へたが、佐藤氏以前にも堀一郎氏によって万葉歌の観点から、井手至氏によって民俗学的見地及び国語学的見地から、黄泉国山中説とまでは行かないが、所謂「山中他界観」は示唆されてゐた。

まづ堀一郎氏は、万葉歌のうち「死者の行方を詠じたもの、死者葬場についてよんだもの、死者について連想している自然現象や物など」を検出し、該当する九十四例のうち「山丘に隠れる、山隠る、山によって故人を偲ぶ」といふ例が四十七例と大部分を占めてゐることから、

わが国の殆んどが神々のうしはぐ山、地上世界に降臨する階梯と見られた着想の背後には、かかる死者昇天、入山の観念が根つよく横たわっており、またそれにふさわしい葬送習俗が存したのではなかったかと考えられる。

また

万葉集を分析した限りでは、死者霊魂が山丘にのぼり、そこにかくれ、もしくは天上の世界に雲隠れると表現した例が圧倒的に多いことは事実であり注目すべきことといわなければならない。

と指摘した[24]。

また井手氏は、まづ民俗学的見地から

上古においては、人々は、浄らかな霊魂――神霊のゆきつどふ処、つまり、他界を遙遠なる処に求めようとした。その意味では、記述のように、水平的に遙かな海の彼方が他界として観じられたのは当然であった。

しかし一方では、その同じ考え方から、垂直的に遙かな天上や、天にもつとも近い処として山岳もまた他界として考えられたようである。〈中略〉上古においては、神霊の鎮まる地と考えられた山岳は、一方において、死霊のこもる墳墓の地、葬送地ともされていた。

とし、堀氏が取り上げたうちの一部の万葉歌を取り上げ、「当時、実際に、山が葬地であり、また山が神霊の鎮まる他界であると観じられていた」ことを述べ、さらに国語学的見地として類例から

ヨモ（jōmō）――ヤマ（jama）

といふ母音交替を想定し、

ヨミ（ヨモ）が山岳的な他界として観じられていたものであつたことは、国語学的にも説明されよう。山が葬地であるとともに、上古において、海と同様に他界の一つとして考えられていたことは、ここに明らかとなつたのである。

と述べ、

ヨミ　　ヲチ
―　　―
ヨモ　　ヲト
―　　―
ヤマ　　ワタ

といふ、「上古において他界と観じられた山（ヤマ）と海（ワタ）とは、それぞれ他界を意味するヨミ（ヨモ）、ヲチ（ヲト）の語を分

立せしめていた」といふ対立を示した。[25] 人の居住区である平地から見て、山と海とはその辺境の地であり、そこに他界が観念されたと思はれる。その辺境たる「ヤマ」と「ワタ」とが同様の母音交替を経て、他界の名称である「ヨミ」と「ヲチ」とに変化してゐることは興味深い。

さてこれらは山中他界観を示唆したものであり、直接黄泉国が山中にあると指摘したものではなかった。さういったなかで佐藤氏が発表した論考[26]は、『古事記』の文脈に即して黄泉国が山中にあることを論じた画期的なものであった。

佐藤論文にはおよそ四つの論拠が用意されてゐる。以下その論点と問題点をまとめる。

第一は、前述した一つ火のことである。イザナキ命が一つ火を灯したから黄泉国は暗い世界であるといふ通説に対し、佐藤氏は「イザナキの命が櫛火を燭したのは、本文で明らかなように、宮殿の内においてのことである。」と指摘した。これは妥当な言及であらう。

第二は、黄泉比良坂の理解についてである。この点が佐藤論文の最重要点であるが、問題もある。

佐藤氏はまづ、イザナキ命が桃の実を投げて八雷神らを撃退した「黄泉比良坂の坂本」の「坂本」を「坂の麓」であると捉へ、「イザナキの命が「千引きの石」を置いて、黄泉比良坂を塞いだのは「坂本」であると解せられる」と、八雷神らの撃退地点と千引石が置かれた地点とを同一の場所であると理解した。

また「黄泉比良坂」は、「黄泉」と冠されてゐる以上、黄泉国に属するといふのが通説の立場であるが、千引石が置かれたのが「黄泉比良坂の坂本」であり、黄泉国の軍勢は「坂を返」って行ったのに、もし「黄泉比良坂」が地下へ向って下る坂であるとすれば、その坂の麓を「千引石」で塞いでしまっては、黄泉比良坂それ自体は葦原中国側に属してしまふし、八雷神も「坂を返」ることができない、が、しかし、もし「黄泉比良坂」が山へ向って上る坂だとすれば、それらの問題は解決するのであるとする。

これらのことから佐藤氏は、

黄泉比良坂は、俗世の側から見て上へ上っている坂として語られているとみられる。いいかえれば、イザナキの命は、黄泉比良坂を逃げくだってきて、その麓にまで辿りつき、そこで「事戸を渡」したのである。つまり、黄泉比良坂は、上へ向かってのぼっている坂、いわゆる山坂として表象せられているのではなかろうか。

と理解する。

この論は『古事記』の文脈に即した矛盾のないものやうに思はれるが、しかし問題点を残してゐる。一つは八雷神らが「坂を返」っていったといふ理解である。これは本文に「到二黄泉比良此二字以レ音。坂之坂本一時取下在二其坂本一桃子三箇上待撃者、悉坂返也。」とある、イザナキ命が黄泉比良坂の坂本に生えてゐる桃の実を取って投げ、黄泉国の軍勢を撃退した場面である。佐藤氏は本文に「坂返也」とあることを前提に論を進めてゐるが、これは写本によって異同がある。詳細は後述するが、佐藤氏は写本によって異同があることを諒解しながらも、「坂返也」を採る根拠を示さずにこの語を前提に立論してゐるので、直ちには従ひ難い。

またもう一つは、佐藤氏が「イザナキの命が「千引きの石」を置いて、黄泉比良坂を塞いだのは「坂本」である」と理解してゐることである。本文に「尓、千引石引二塞黄泉比良坂一、其石置レ中」とあるやうに、千引石が置かれたのは「黄泉比良坂」であって、その「坂本」だとは『古事記』には書いてゐないのである。『古事記』の本文を曲解して坂本に石が置かれたと理解してしまふのは、佐藤氏のこじつけと云はざるを得ず、すでに阿部真司氏や中村氏によって批判されてゐる。[27] これはこの第二点全体に関はる問題であり、従って、佐藤氏の掲げる前提条件は見直しが必要と思はれる。

第三は、比婆の山についてである。『古事記』にイザナミ命が比婆の山に葬られたと書いてゐる（故、其、所二神避一

之伊耶那美神者、葬下出雲國与二伯伎國一堺比婆之山上也。）のを根拠の一つとし、黄泉国は山であるとする。これは西條氏が「イザナミは比婆の山に葬られたのであるが、しかし、イザナキは、イザナミに会うために比婆の山に赴いたわけではなかった」と指摘する通り、[28] 葬送した場所と訪問した場所とに隔たりがあることが問題である。これについても後述する。

第四は万葉歌についてである。『万葉集』一五八番歌に「山吹の　立ちよそひたる　山清水　汲みに行かめど　道の知らなく」といふ歌があるが、「山吹」は「黄色」を、「清水」は「泉」を指し、黄泉国を暗喩した歌で、かつそれが山にあると示した歌だとされる。佐藤氏はこれを引き合ひに黄泉と山との関はりを指摘するのであるが、これはすでに堀氏が述べたところであった。

佐藤氏が論拠とした点は以上の四点である。以上のことから佐藤氏は、前述の井手氏の母音交替の論も引き、黄泉国は山の中であると結論附けられた。この見解は後に神野志隆光氏が支持し、[29] 山中説は広く受け入れられるやうになっていった。

しかし、佐藤論文の最大の論拠であらう第二点については、更なる見直しが必要かと思はれる。よって、山中説にも直ちに従ふことはできない。

四、黄泉比良坂について

畢竟、黄泉国をどう理解するかは、葦原中国と黄泉国とを接続する境界である黄泉比良坂をどう把捉するかが問題である。

まづ「黄泉比良坂」の語義について、宣長は「平易なる意なり」と述べる。[30] 尤も、宣長は黄泉国を地下とするので、下降するなだらかな坂であると捉へてゐるのだらう。倉野憲司氏は「ヒラ」について「元来は「崖」の意であつたものが、その本意が忘れられて、「平」即ち平坦の意に解せられるやうになつたものと思はれる」とし、「サカ」については「もともと「堺」の意であるが、いつとはなしに「坂」の意に解せられるやうにな」ったのだとする。[31] また西郷信綱氏は「この坂は黄泉の国とこの世とをしきる境のこと。ヒラは崖である」と述べた。[32]

対して阿部真司氏は、

『古事記』は〈黄泉比良坂を〉黄泉国とこの世とをしきる「堺」としか表現していない。倉野氏、西郷氏共に地下へ向かう坂という認識があるゆえに、サカは境であり、ヒラは崖であるというところから飛躍し、下へ向かうなだらかな坂の境とか、きり立った境から死体を遺棄する洞穴という地平にまで行ってしまった。行きすぎである。

と批判し、

サカには当時から所謂傾斜面をもった坂の意と境界の意の二つがあったが、その両者の語義が黄泉比良坂に付いていたと見るのではなく、境界の意だけであったと考える。

と、黄泉比良坂を長さを持った坂道ではなく、ただ一点だけの、境界であるポイントだと捉へる。またトヨタマヒメ命が塞いだ「海坂」を引き合ひに出し、

「海坂を塞へ」「黄泉つひら坂に引き塞へ」という時、この坂は同じ語感で共に堺でなければなるまい。片や堺でもう一方が所謂坂であるなどとはいえまい。

と述べる。しかしここには見落としがある。それは、「海坂」はただの「坂」であり、「黄泉比良坂」は「ひら坂」であるといふことである。古語のヒラが崖の意であり、また西郷氏がヒラの附く地名が傾面、坂、崖に多く関はること

を指摘してゐるやうに[33]、ヒラは傾斜の意を包含してゐるのであり、ゆゑに「海坂」は傾斜を持たない境界であっても、「黄泉比良坂」は傾斜を持つ境界であったと考へる。従って「ヨモツヒラサカ」の語義は「ヨモツ（黄泉国の）ヒラ（傾斜を持った）サカ（境界）」であるといふ前提をもとに検討を進める。

さて、佐藤氏が「千引石」が置かれたのは「黄泉比良坂の坂本」であり、黄泉国の軍勢が「坂返」って行ったことから、黄泉国を山中に位置づけたが、そこに文字の異同の問題があることは前述した通りである。「坂返也」とする写本は兼永筆本、前田本、猪熊本、寛永版本だが、他に「逃返也」とする伊勢本、春瑜本、道果本、延佳本、「攻返也」とする真福寺本があって、一定しない。もし「坂返也（さかをかへりき）」が正しいとすれば、坂本で八雷神らを撃退した以上、黄泉国が地下にあっては八雷神らが坂を帰ることができないといふのは佐藤氏の指摘の通りであるが[34]、「逃返也（にげかへりき）」「攻返也（せめかへしき）」であれば、黄泉国が坂の下であっても、坂の上であっても、あるいは阿部氏の云ふやうに坂でなくても、矛盾は生じない。

この問題の語について、倉野氏は「攻返也」を採り、

> 従来の註釈は、八雷神と黄泉軍を主体に考へて、それらが坂より返つたとか坂を返つたとか解いてゐるが、私は桃子を主体に考へて、（桃子三箇を取って待撃つたので、その桃子が）八雷神と黄泉軍を残らず黄泉の国に攻め返したと解くのである。

とした[35]。

また西條氏も「古事記の中では、カヘルは「還」を用い、「返」はカヘスに当てるのが通例」であり、もし「サカヲカヘリキ」と訓ませたいのであれば「坂還也」とあるべきところに、「「返」の字が用いられているのは、むしろ、カヘルで訓まれるのを避けたからではないだろうか。カヘスなら「攻返也」に対応する」のだとして、「攻返也」を

採る。[36]

これらに対しては、同一文のなかで主語が明示されないまま交替するから無理があるといふ寺川眞知夫氏や目黒礼子氏の批判があり、西宮一民氏もまた「桃子が敵を攻め返した」といふ表現は文脈上不自然であり、「攻め返す」といふ複合動詞は存在しえないとして三者は「坂返也（さかをかへりき）」を採ってゐるが[37]、「坂返也」であっても「（イザナキ命が）桃の実三つを取って投げたことにより、（八雷神らが）坂を返った」と、同一文脈内で動作の主体が交替することになる。「（イザナキ命が）桃の実三つを取って投げたことにより、（イザナキ命が八雷神らを）攻め返した」と解釈すれば問題なからう。よって本稿では「攻返也」を採ることが妥当であると考へる。

その「攻返」しが行はれたのは「黄泉比良坂の坂本」であった。「坂本」が「坂の麓」を指すことは佐藤氏の述べると通りであらう。ゆゑに佐藤氏は「下ってきた坂の麓」と理解するのであるが、しかし「坂の麓」といふのは「これから上っていく坂の麓」とも解し得る。

神野志隆光氏は、佐藤説に賛同したうへで、根の堅州国訪問譚の黄泉比良坂の場面にスサノヲ神がオホナムチ神を「遙望」したといふ語が登場する（故尓、追二至黄泉比良坂一。遙望呼。）ことに注目し、『古事記』におけるほかの「望」字を併せて検討したところ、「望」字は遠望の意で一貫し、さらに坂に関はるときは高所から下方を見る意であるから、黄泉比良坂から下ってきたところに葦原中国があるとし、黄泉国山中説の傍証とした。[38]

一方吉野政治氏は、『古事記』景行天皇、『日本書紀』神武天皇即位前己未年春二月、『播磨国風土記』揖保郡琴坂、『枕草子』二一二段、『今昔物語集』巻十三第八語、『藤河の記』、『八十浦之玉』下巻下一〇五六平内遠における「坂本」の語を検討し、その義が「これから上っていく坂の麓」であることから黄泉比良坂もさうであると捉へ、また神野志氏の説に対しては、『古事記』以外では視線の上下が関はらない「望」字もあるといふ例を挙げて批判し、黄泉国は

地下であることを論じた。[39]

しかしながら、神野志氏の論の要点は、『古事記』の中で「望」字は視線が上から下へ向くものとして用ゐられてゐるといふ点であらう。そこで黄泉比良坂は、「望」字を中心に考へれば葦原中国に向かって下る坂と解せるし、「坂本」の語を中心に考へれば、葦原中国に向かって上る坂であると解せる。これは矛盾することであらうか。

その疑問を解消するのは姜鍾植氏の論[40]である。姜論文には三つの要点がある。

まづ第一に、境界である坂には一定の幅があり、共同体がそれを認識する場合、共同体から見て内側の範囲の坂を対象として捉へるのであって、外側の範囲の坂からを異郷だとするのだといふ前提から、「黄泉比良坂」といふ黄泉国側の坂がある以上、葦原中国側の坂もあるはずだとする。

「黄泉比良坂」は黄泉国から捉えた「坂」であって、葦原中国側から捉えた「坂」でないことを忘れてはならない。少なくとも当該説話は葦原中国側の斜面を「黄泉比良坂」とは記していない。すると、「黄泉比良坂之坂本」は、自ずと黄泉国側の「坂本」ということになるのであろう。

といふことから佐藤説に反対し、吉野説に別の観点から賛同してゐる。

第二に、中村氏が、坂本がある以上「坂上」もあるはずだと言及した[41]ことを受け、イザナキ命が坂本で八雷神らを撃退したのちイザナミ命が追っ手になったのだから、イザナキ命はなほ逃げ、坂上あたりへと至ったのだらうと推測し、『古事記』雄略天皇、同崇神天皇、『日本書紀』崇神天皇十年九月壬子、『播磨国風土記』託賀郡法太里、『豊後国風土記』日田郡、『日本書紀』景行天皇四十年是歳、『古事記』履中天皇、『同』根之堅州国訪問段（これらは姜論文に登場する順番で記述してゐる）に見られる、重要なことが行はれる、特に重大な言葉を発するのが坂上であるといふことを傍証とし、

伊耶那岐命と伊耶那美命とが千引石を置いて「事戸を度」した一連の行為は黄泉比良坂の「坂上」で行われたのである。

とし、「坂上」といふ位置の存在と、「事戸度」が行はれた場所がその「坂上」であることとを指摘する。

そして第三に、そもそも坂といふものは越えるものであると捉へ、『万葉集』三一九四、『同』四四〇七、『日本書紀』斉明天皇六年是歳、『同』推古天皇三十五年夏五月、『同』神武天皇即位前戊午年十一月癸亥朔己巳、『同』天武天皇元年七月辛亥、『同』景行天皇四十年是歳、『日本霊異記』下巻第二十九話、『播磨国風土記』賀毛郡、『古今和歌集』巻十五　恋歌五・七八九、『日本霊異記』下巻第二十三話に見られる坂を越える例を検討し、坂は上るだけでも下るだけでもなく越えるものであること、そしてそれは生死の場に関はることもあること、上り坂と下り坂との中間地点にある坂上は究極の境界線であることを論じた。

姜氏はこれら三点から、

境界（＝坂）の認識を立体的に捉えるとすると、黄泉国側から捉えた黄泉比良坂の場合は、黄泉国側の「坂本」が境界の始発点であると解される。また、視線が届く極限線である黄泉比良坂の頂上（＝「坂上」）が境界の究極点であると解される。そういった境界の究極点で伊耶那岐命と伊耶那美命とが「事戸を度」し絶縁の宣言を交わしたのである。

とまとめる。従来の研究では黄泉比良坂は上っていく坂か、下っていく坂かといふ見方がなされてゐたが、どちらでもあるといふ新たな視座を呈した研究である。しかし惜しむらくは、肝心の黄泉国それ自体については、「本考察では葦原中国と黄泉国との位置関係については触れることができなかった」としてゐることである。そこで本稿ではその「位置関係」に踏み込んでみたい。

五、他界について

西郷氏の『古事記の世界』や、神野志氏の『古事記の世界観』をはじめ、『古事記』における世界観、他界観についてはすでに多くの論説がある。本稿は他界のひとつとされる黄泉国について考察を行ってゐる訣であるが、結論に入る前に、そもそも他界とは、といふことについて触れておきたい。

『古事記』は、中・下巻は基本的に天皇が統治する版図である「天下」を舞台とした物語である。一方、上巻では、時に天つ神たちの世界である高天原を舞台とし、時に国つ神たちの世界である葦原中国を舞台とし、葦原中国は他界と関はり合って物語が展開する。

高天原を他界のひとつと捉へてよいかどうかは問題があらう。高天原―葦原中国―黄泉国といふ垂直的な三層構造で『古事記』の世界観を捉へる立場からは、高天原は黄泉国と並列される他界の一つと認識されよう。しかし本稿ではそのやうな世界観では捉へないのであり、また神野志氏の指摘にあるやうに[42]、高天原は、アメツチと云ったときのアメ側の世界であって、ツチ側の世界である葦原中国とともに二元的神話世界の対をなす存在なのであり、ほかの他界と同列に捉へるべきではないと考へる。

高天原は、アメといふ広大な領域の中に存在する世界の一つである。そして高天原には、ツチといふ広大な領域の中に存在する葦原中国が対応する。そのツチといふ領域の中で、葦原中国には水平的に複数の他界が接してゐるのであり、それぞれの他界にとってのアメ側の世界もあるいは存在するかもしれないが、『古事記』上巻は高天原と葦原中国とを主軸にして話が展開するので、触れられることはない。本稿ではそのやうに『古事記』の世界観を捉へる。

『古事記』は、葦原中国から見て四つの他界を設定してゐる。すなはち「黄泉国」「根之堅州国」「常世国」「海神の国」であるが、注目すべきは、これらが「葦原中国」と同様、すべて「国」と称されてゐるといふことである。[43] 賀茂真淵が述べたところでは、「国」は限りある範囲、統治される範囲であり、無限に広がる世界そのものではない。[44] すなはち、他界であるところの「国」は、この世界である「葦原中国」と全く異なる異世界なのではなく、いま云ふところの日本に対する外国と同様、習俗や規範、共同体が異なるだけの、同レベルの世界観なのである。ゆゑに「ほかの世界」の意である「他界」といふ語を用ゐるよりは、「他国」と云ったほうが適切かと思ふが、便宜上一般に用ゐられる「他界」と云っておく。なので本稿で用ゐる「他界」の語は、字面としては「異なる世界」を意味してしまふかもしれぬが、ニュアンスとしては「異なる国」である。

さて「国」が異なるといふことは、主体から見て異なった要素があるといふことである。黄泉国においてはそれは「ケガレ」であり、当該説話は、『古事記』の文脈の中においては、初めて「ケガレ」が認識され、初めて「他界」が認識された時であったのだらう。イザナキ命がイザナミ命の遺体に腹這ひ泣いたといふ記述（尓、伊耶那岐命詔之、「愛我那迩妹命乎。那尓二字以レ音。下效レ此。謂易二子之一木一乎。」乃匍二匐御枕方一、匍二匐御足方一而哭）からは、イザナキ命のイザナミ命に対する情愛は多分に見て取れども、死に対するケガレの観念は感ぜられない。しかし「宇士多加禮斗呂ミ岐」たイザナミ命の姿を見たとき、イザナキ命は「見畏」む（燭二一火一、入見之時、宇士多加禮斗呂ミ岐弖、〈中略〉於レ是伊耶那岐命、見畏而逃還之時）のである。これが、「ケガレ」といふものが認識された瞬間であった。

また『古事記』において、「葦原中国」の語は、黄泉国の軍勢を撃退した桃に対してイザナキ命が「尓、伊耶那岐命、告二桃子一、「汝、如レ助レ吾、於二葦原中國一所レ有宇都志伎上此四字以レ音。青人草之、落二苦瀬一而患惚時、可レ助。」告」と言葉を掛けたときに初めて登場する。「日本」といふ我が国の国号が、もと対外的に使はれる語であったやうに、「神道」

といふ我が国の固有の信仰を表す名称が、外来宗教との区別のために使はれだしたやうに、ソトが認識されるからこそウチを指す固有名詞が発生する。逆に云へば、ソトを認識しなければウチを指す固有名詞は必要ない。これまで「この世界」であった葦原中国は、他界である「黄泉国」を認識することによって、「葦原中国」といふ固有名詞を持つ必要が生まれたのである。

『古事記』全体における世界観は、冒頭に述べたやうに高天原―葦原中国―黄泉国を上中下の三層構造の垂直的なものとして捉へるのがかつては通説的であったが、近年の研究では否定されるやうにさうではなく、「アメ」に対応する「ツチ」の中に、葦原中国や、黄泉国、根之堅州国、常世国、海神の国などといった葦原中国から見ての他界が水平的に存在してをり、それぞれの他界は境界によって葦原中国と繋がってゐたと考へられる。そして『古事記』の文脈においては、これらの境界はやがて塞がれ、天皇が統治する版図としての「葦原中国」が確立し、「天下」へと繋がってゆくのである。

さういった境界は世界の辺境の場所である山や海に観念された。他界から寄り来る神々は山や海に現れるのであり、また葦原中国から他界に行くときは山や海を通って行くのである。誤解してはならないのは、山や海は他界との接点なのであって、他界そのものではないといふことである。共同体が認識する「この世界」から見て、山や海は世界の「端」であり、一方他界から見ても同様に世界の「端」が存在してゐる。その「端」と「端」とは時に接続されると観念されたのであるといふことを筆者はかつて論じた。(45)

『万葉集』一八〇四番「弟の死にけるを哀しびて作る歌」に

父母が　成しのまにまに　箸向ふ　弟の命は　朝露の　消やすき命　神の共　争ひかねて　葦原の　瑞穂の国に
家なみや　また帰り来ぬ　遠つ国　黄泉の境に　延ふ蔦の　おのが向き向き　天雲の　別れし行けば　闇夜なす

思ひ惑はひ　射ゆ鹿の　心を痛み　葦垣の　思ひ乱れて……

とあり、その反歌である一八〇六歌には

あしひきの　荒山中に　送り置きて　帰らふ見れば　心苦しも

とある。ここでは「弟」を葬ったのは「荒山中」であるが、しかしその弟がゐるのは「遠つ国黄泉の境」であると歌はれてゐる。当然『古事記』の他界を考察するうへで『古事記』以外の世界観を持ち出すのは危険であるが、『万葉集』に収められた歌謡は上代に存した観念のひとつといふ点において取り上げる価値はあらう。

一方、イザナミ命が葬られたのは本文に、

故、其、所二神避一之伊耶那美神、葬レ出雲國与二伯伎國一堺比婆之山上也。

とあるやうに「比婆の山」であったが、イザナキ命が訪問したのは比婆の山ではなく

於レ是、欲レ相二見其妹伊耶那美命一、追二往黄泉國一。

とあるやうに「黄泉国」であった。比婆の山に葬ったと明記されてゐるにも関はらず、イザナキ命は当然のこととして黄泉国に往くのである。

すなはち、死体を葬るのはこの世界の辺境であり他界との接点である山であったが、葬られた者はその先の他界に往くと観念されたのである。

六、結論

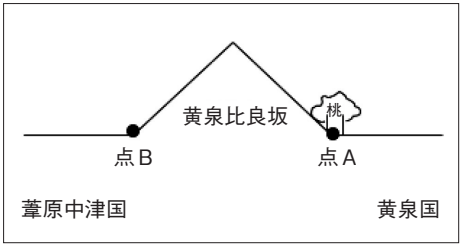
以上のことを踏まへたうへで、本稿の結論に入りたい。

本稿と同様の結論を持つ目黒礼子氏は、

平野の間に山があれば、山のこちら側とあちら側でべつべつに集落が発生する。山を挟んで同一の集落が形成されるとは考え難い。これが山がどちらの集落でもないことの本来の理由であろう。そして、人間の力では支配しきれない土地として考えられ、その畏怖の念が山に所有者をおくのを遅らせたものと思われる。

人の力の及ばない、人の世界ではない場所。まさしく山は他界であった。であるから、死んだ人が死者の国に行けるように、現世に一番近い他界である山に死体を遺棄したのであろう。山は他界であると同時に、他界への入口でもあった。これがヨモツヒラサカのヒラが持っているイメージではないだろうか。

といふ点から葦原中国と黄泉国との関係を図①のやうに捉へ、千引石越しに事戸度しをした場所は、図の点AからBの間ならどこでもよく、「山状の黄泉比良坂を挟んだ黄泉国と葦原中津国には上下関係はなく、平面に位置していることになる」と結論附けられた。(46)

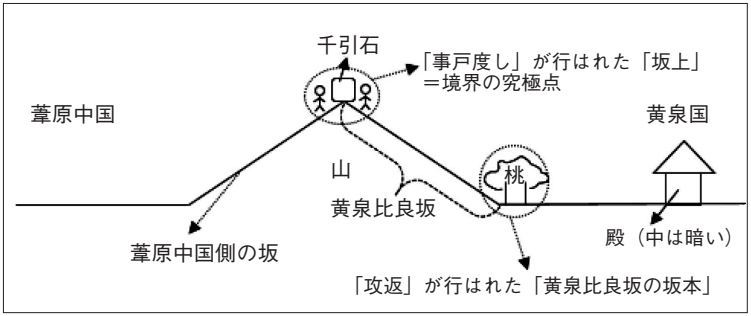


図①　目黒氏の認識

目黒氏のこの言及は、おほむねその通りかとは思ふが、しかしこの結論に到るまでの過程が根拠に乏しく、千引石の位置がどこでもいいといふのも明瞭でない。

これまで見てきたことを踏まへれば、葦原中国と黄泉国との位置関係は次頁の図②のやうにならう。

姜氏は前述の通り「本考察では葦原中国と黄泉国との位置関係については触れることができなかった」としてゐるが、その「位置関係」にまで踏み込んで考へてみたとき、坂本があって、坂上があって、坂が越えるものであるのならば、葦原中国と黄泉国とは、上って、そして下る坂を隔てて存在してゐるのではなからうか。



図②　本稿の結論

「黄泉比良坂」は、傾斜を持った坂であると同時に、葦原中国と他界である黄泉国との境界であった。坂は越えるものであり、葦原中国側の坂から黄泉国側の坂までが広義の「境界」であって、その始発点はそれぞれの「坂本」であり、「黄泉比良坂」とは「黄泉」と冠されてゐる以上、黄泉国側の坂であった。

「黄泉比良坂の坂本」とは、黄泉国側のこれから上って行く坂の麓であり、そこには桃の木があって、イザナキ命はその桃の実を取って黄泉国の軍勢を「攻返」し、黄泉比良坂を上って、狭義の境界、つまり境界の究極点である坂の頂上、黄泉比良坂の「坂上」において千引石を引き塞へ、イザナミ命と「事戸を度」した。その後イザナキ命は、葦原中国側の坂を下ってきて葦原中国に帰還したのだと推察できる。

黄泉国は地下でもなければ、山それ自体でもなく、山を越えた向かうにあると観念された葦原中国と同レベルの世界であった。そこには「殿」があって、その中は火を灯す必要があるほど暗かったが、その周囲は火の光が必要ない程度には明るい。そして黄泉国と葦原中国とを接続するのは、どちらの世界から見ても世界の突端である山といふ境界であり、山の黄泉国側は黄泉比良坂と称された。境界の究極点である坂上は千引石によって塞がれ、分断されることになるのである。

『古事記』の文脈を読み解いたとき、黄泉比良坂の諸相と黄泉国の所在とに

ついて、以上のことが云へよう。イザナミ命は比婆山に葬られた。そしてイザナミ命はその後、神話世界においてはその先にある黄泉国に存在したのである。

かくのごとき、黄泉国は地下でも山中でもなく、境界である山を越えたその向かうであるとする説は、未だ提唱者が少ないことからも、まだ検討の余地を残してゐるであらう。さらなる観点からの後考を俟ちたい。

なほ本稿は『古事記』の黄泉国について、他の上代文献を傍証としつつ論じたため、『日本書紀』における黄泉国訪問譚については言及できなかった。『古事記』との類似性が特に高い第五段第六の一書については、一旦は本稿の理解を適用して問題ないと考へる。しかしこの一書にある「或所謂泉津平坂者、不三復別有二處所一、但臨レ死氣絶之際、是之謂歟。」といふ一文は問題を残してゐるが、これに対する明瞭な解釈を知らない。また同段第九の一書の「伊弉諾尊、欲レ見二其妹一、乃到二殯斂之處一。」といふ説話についても、別の観点からの検討が必要であらうが、本稿では及ばなかった。併せて今後の課題としたい。

註

（1）本居宣長著『古事記伝』六乃巻（『本居宣長全集』第九巻　筑摩書房　昭和四十三年）所収　二三七、二三八頁

（2）西宮一民編『古事記　修訂版』（おうふう　昭和五十三年）

（3）『新潮日本古典集成　萬葉集』一～五（新潮社　昭和五十一～五十九年）

（4）倉野憲司「古代人の異郷観」『古典と上代精神』（至文堂　昭和十七年）所収
西郷信綱著『古事記の世界』（岩波書店　昭和四十二年）二六頁

（5）『日本古典文学大系1　古事記　祝詞』（岩波書店　昭和三十三年）六三頁

（6）『日本思想大系1　古事記』（岩波書店　昭和昭和五十七年）三二四頁

（7）西宮一民校注『新潮日本古典集成　古事記』（新潮社　昭和五十四年）三六頁

（8）佐藤正英「黄泉国の在りか　『古事記』の神話をめぐって」『現代思想』十二巻十二号（青土社　昭和五十七年九月）所収

（9）中村啓信「「黄泉」について」『古事記年報』三十六（古事記学会　平成五年）所収

（10）すでに倉野憲司氏の指摘に詳しい（『古事記全註釈』第二巻（三省堂　昭和四十九年）二四〇～二四二頁）が、筆者の言葉で補足を加へ、もう少し詳しく説明しておく。ツクヨミ命は『古事記』表記では「月夜見命」であり、この「夜」は甲類であるが、黄泉国のヨは、古事記に「豫母都志許賣」、日本書紀第五段第七の一書に「譽母都俳遇比」「餘母都比羅佐可」といふ表記があり、これらはすべて乙類のヨであるので、一致しない。ただし『日本書紀』表記の「月讀尊」の「讀」のヨは乙類である。またミについては、そもそも黄泉を仮名書きした例がなく、判断できない。日本古典文学大系『万葉集』二の補注では「ヨミという言葉は、ヨモツヒラサカ・ヨモツヘグヒなどのヨモの転であろう。ヨモは、ヨもモも乙類でyömöであるから、木kö（乙類）kiとなるように、穂（ホ）Föが秀（ヒイヅ）となるときFiとなるように、ヨミのミは乙類miであろうと思われる。ただし仮名書きの実例はない」と述べられるが、さうだとすると「月夜見命」の「見」、「月讀尊」の「讀」のミは甲類なので一致しないことになる。

（11）青木紀元著『祝詞全評釈』（右文書院　平成十二年）二七〇頁

（12）神野志隆光著『古事記の世界観』（吉川弘文館　昭和六十一年）八二～八四頁

（13）前掲　神野志『古事記の世界観』八二、八三頁

（14）前掲　神野志『古事記の世界観』八一、八二頁

（15）前掲　中村「「黄泉」について」

(16) 秋元吉郎校注『日本古典文学大系　風土記』（岩波書店　昭和三十三年）一八三頁
(17) 前掲　中村「「黄泉」について」
(18) 西條勉「黄泉／ヨモ（ヨミ）――漢語に隠される和語の世界――」『古事記年報』四十一（古事記学会　平成十年）所収
(19) これは中村論文が挙げた『捜神後記』の内容である。
(20) 土屋昌明「黄泉国と道教の洞天思想」『古事記年報』五十八（古事記学会　平成二十七年）所収
(21) 前掲　中村「「黄泉」について」
(22) 飯田季治は『古事記』の「黄泉比良坂」と『日本書紀』の「黄泉平坂」とを同一視する見解に対して「日本紀には『隅田川を渡つて、暫らく徒歩して或る公園に出た』と傳へ、古事記では『加茂川を渡つて暫らく徒歩して或る公園に出た。其の公園は京都の祇園である』と傳へられてゐる場合、日本紀の傳へを解釋するのに、『或る公園とは古事記に京都の祇園也とある。即ち隅田川を渡つて暫らく徒行して京都の祇園に到着したのである』と説くのと同様で、僻事である」と論駁してゐる（『日本書紀新講』上巻（明文社　昭和十一年）八五～八七頁）が、それと同様のことである。
(23) 前掲　『本居宣長全集』第九巻　一六二頁
(24) 堀一郎「万葉集にあらわれた葬制と、他界観、霊魂観について」『宗教・習俗の生活規制　日本宗教史研究Ⅱ』（未来社　昭和三十八年）所収
(25) 井手至「所謂遠称の指示語ヲチ・ヲトの性格――上古における他界観念との関連において――」『國語と國文學』（東京大学国語国文学会　昭和五十五年八月号）所収
(26) 佐藤正英「黄泉国の在りか　『古事記』の神話をめぐって」『現代思想』十二巻十二号（青土社　昭和五十七年九月）所収
(27) 阿部真司「黄泉比良坂考　―『古事記』のサカを中心にして―」『高知医科大学一般教養紀要』一（高知大学　昭和六十一年）

所収「〈佐藤〉氏の論の前提には「千引の石」が置かれたのは「坂本」であるということにあるが、本文には書かれておらず、氏の解釈的挿入にすぎない」

前掲　中村「「黄泉」について」「少くとも坂本に石が置かれたと『古事記』に書いていないのだから、佐藤氏の立論は根拠が不十分」

(28) 前掲　西條「黄泉／ヨモ（ヨミ）――漢語に隠される和語の世界――」

(29) 前掲　神野志「「黄泉国」をめぐって　―『古事記』の神話的世界―」、『古事記の世界観』、神野志・山口佳紀著『古事記注解2』（笠間書院　平成五年）、神野志・山口校注『新編日本古典文学全集1　古事記』（小学館　平成九年）など

(30) 前掲　『本居宣長全集』第九巻　二五〇頁

(31) 前掲　倉野『古事記全註釈』第二巻　二五六頁

(32) 西郷信綱著『古事記註釈』第一巻（平凡社　昭和五十年）一八五頁

(33) 前掲　西郷『古事記註釈』第一巻　一八五頁

(34) ただしこれは「坂返也」を「サカヨリカヘリキ」と訓んだ場合である。「坂返也」を採る写本は全て「サカヨリカヘリヌ」と訓じてをり、この訓み方だと出発点は坂本で、坂とは別の方向に帰って行ったことになるので、佐藤説とは矛盾が生じる。尤も、「ヨリ」に相当する字がないのに「サカヨリ」と訓むのは無理があらう。西條氏はこれについて、「あえて無理をしてまで、古写本に「坂ヨリ返リヌ」と訓んでいるのは、古くから、「黄泉国」が地下とみなされてきたことを示しているので、この点は注意すべきであろう」と述べる。そこで「坂返也」を「サカヨリカヘリキ」と訓むべきだとしたのは西宮一民氏であった（『日本上代の文章と表記』『新潮日本古典集成古事記』『おうふう社古事記』など）。これに従って「サカヨリカヘリキ」と訓んだ場合、坂の頂上から坂を下って帰って行くか、坂の麓から坂を登って帰って行くことになるので、後者なら佐藤説と矛盾は生じない。

(35) 前掲　倉野『古事記全註釈』第二巻　二五八頁

(36) 前掲　西條「黄泉／ヨモ（ヨミ）――漢語に隠される和語の世界――」

(37) 寺川眞知夫「黄泉国と根之堅州国」『同志社女子大学学術年報』第三十九巻Ⅳ（同志社女子大学総合文化研究所　昭和六十三年）所収

目黒礼子「黄泉国の位置　―黄泉比良坂を中心に―」『群馬県立女子大学国文学研究』第十九号（群馬県立女子大学国語国文学会　平成十一年三月）所収

西宮一民「古事記「訓読」の研究」安津素彦編『聚注古事記』（國學院大學日本文化研究所　昭和五十八年）所収

(38) 神野志隆光「「黄泉国」をめぐって　―『古事記』の神話的世界―」『風俗』二十二巻三号（日本風俗史学会　昭和五十八年九月）所収

なほ附言しておくと、神野志氏は黄泉国と根之堅州国とを「一緒にするわけにはいかない」といふ立場を取ってゐるので、一見この論理は破綻してゐるかにも思へるが、おそらく神野志氏は、黄泉国と根之堅州国とは同一視しないが、それらの場面に登場する黄泉比良坂は同一のものである、つまり、黄泉国と根之堅州国とは通路を同じくする別世界であると捉へるのであらう。

(39) 吉野政治「「黄泉比良坂の坂本」――黄泉国の在処について――」『東アジアの古代文化』九十一（大和書房　平成十一年）所収

(40) 姜鍾植「「黄泉比良坂」考」『古事記年報』四十二（古事記学会　平成十一年）所収

(41) 前掲　中村「「黄泉」について」

(42) 前掲　神野志『古事記の世界観』五六、五七頁

(43) すでに神野志氏が指摘してゐるが、海神の国は記中に固有名詞が見えないが、「故、至二三年一、住二其國一」といふ文があり、

ワタツミ神が統治する範囲を指して「國」と云はれてゐるので、「国」の一つと捉へてよい（前掲『古事記の世界観』四六、四七頁）。また本稿では高天原を他界からは除外したが、アマテラス大神の発言に「欲レ奪二我國一耳」とあり、高天原を指して「國」と云はれてゐるので、高天原を他界の一つと捉へたとしても、本稿の論旨に影響はない。

（44）賀茂真淵「久邇門致考」『増訂賀茂真淵全集』巻十一（吉川弘文館　昭和五年）所収

（45）拙稿「天浮橋の機能と実体と　――国見を行ふ場所――」（『神道史研究』第六十六巻第二號（神道史学会　平成三十年）所収）

（46）前掲　目黒「黄泉国の位置」なほこの図①は目黒論文登載の目黒氏が作成された図を筆者が模作したものである。

【附記】本稿は、筆者が皇學館大学大学院に提出した修士論文「古事記に於ける黄泉国の研究　――その諸相と境界とをめぐって――」の主論部分を書き改めたものである。ご指導いただいた河野訓先生をはじめ、副査をお勤めいただき様々なご指南を賜った加茂正典先生、橋本雅之先生、また大学院の授業や院内での発表等を通じ多くのご助言をくださった白山芳太郎先生、菅野覚明先生、板東洋介先生、新田惠三先生に、末筆ながら深く感謝申し上げます。

（あだち　りょう・皇學館大学大学院神道学専攻博士後期課程三年）